西村 幸夫 教授
窪田 亜矢 准教授

2011

離島漁村における日常的な交流を誘発する空間とその成立要因に関する研究
- 三重県答志島答志集落を対象として -

A study on space and factors increasing everyday communication in an island fishing village
- A case of Toshi village in Toshi island, Mie prefecture -

106167　安川 千歌子

The purpose of this study is to describe typical codes of this village and interactions between behaviors and space and to make clear spaces and factors increasing everyday communication in Toshi. From the observation of outdoor communication, this study shows the special factors increasing everyday communication. The compact scale of this village and the contiguity of workplace, shops, and houses are the base factor, and busy streets and staying spaces are the main factors. Especially, staying spaces are closely connected to the life in Toshi. They are typical and steady. They consist of devices and behaviors. The devices are born in response to the typical life in this village, and they are very essential. The locality of Toshi is to live with the sea. History, culture, economy, society, and life in Toshi are based on it and exist because of it. The devices are so. They keep the community good by increasing everyday communication, and the community supports the devices represented by SOTONAGASHI by making it possible to open their life to outdoor. They interact each other. The locality of Toshi gives the necessity of growing strong and good community. The spaces in response to it are inherent in Toshi.

0．序

0－1．研究の背景

見知らぬ人々の集合としての都市部においては、個々の権利やプライバシーが重視され、空間は敷地の中へ、部屋の中へと閉じ、近隣住民間の日常的な交流は減少し続けてきた。その反動か、近年ルームシェアの人気が高まっているが､温かな近隣関係への憧れとも感じられる。

一方、漁村集落では、独自の集落空間や生業や文化の共有を背景に、多種多様な交流が日常の風景としていたるところで見られる。これらは集落に一様に分布しているわけではなく、集落固有のコードの上に表れているものである。交流を生む空間とは一体どのようなものか。

0－2．研究の目的

漁村における交流は、集落固有のコードの上に、日々の生活行動や社会的なシステムなど様々な要因や人々が出会う機会が存在する結果として発生する現象である。本研究では、まず、集落の地域性をふまえ、①屋外、屋内を問わず集落内で発生する交流を整理し、研究対象としての屋外空間における交流を位置づける。その上で、屋外空間における人と人の交流は、全てそれを誘発する何らかの空間的な仕掛けや仕組みが存在しているという視点に立脚。②集落固有のコードの上にある人と空間の相互作用を描き、漁村における交流を誘発する空間とその成立要因を詳細に明らかにすることにより、都市部において交流を生む空間計画の示唆を得たい。

実態観察の対象には、都市化とは無縁であった漁村集落として三重県答志島の答志集落を選んだ。

0－3．既往研究と本研究の位置づけ

答志の居住空間については、間取りとその変容について、外部空間については、道の性質や構成原理、外流しの存在による家事活動の外部化などが既に述べられているが、そこでの活動の実態や交流の実態、交流を誘発する空間の成立要因について明らかにしたものはない。

他の漁村集落においては、交流と空間の関係について調査・分析したものはあるが、その空間の成立要因を背景の集落独自の生活・文化を捉えながら詳細に考察したものはない。本研究では、答志集落の交流を誘発する空間の空間的な特徴のみならず、固有名詞を明らかにし、その背景にある生活・文化に支えられた成立要因を詳細に紐解く。

0－4．研究の方法

本研究では、屋外空間における交流の実態観察調査を基本としながら、地域性を捉え、成立要因を詳細に明らかにするために文献調査、空間調査、ヒアリング調査、アンケート調査を行った。

0－5．言葉の定義

本研究では、交流を誘発する空間を研究対象とするため、「交流」という言葉をはじめに定義しておく必要がある。背景で述べた、近隣住民同士が直接対面しての交流が減少しているという問題意識から、本研究では交流を「2 人以上の個人が広がりをもった同一空間内に存在し、互いの存在を認識して挨拶や会話等のなんらかの言葉を交わす行動」と定義する。

1．答志集落の概要と交流の特性

1－1．答志の地理的環境

答志島は、三重県鳥羽市の有する 4 つの有人島の 1 つで、鳥羽港の北東約 2.5km、伊勢湾の入口に位置している。答志島は、4 つの離島、答志島、菅島、坂手島、神

島の中で最も面積が大きく、その面積は約6.98㎢である。山がちで平坦地は少ないが、島内には北東部に答志、和具、南西部に桃取の 3 つの集落がある。答志集落は、人口 1295 人、世帯数 343 戸と共に 3 集落の中で最も多い。答志集落と本土は市営定期船で結ばれており、所要時間は約 30 分である。海岸はリアス式海岸地形で沿岸には多くの岩礁が存在、また伊勢湾の入口で伊勢湾の低水温流と黒潮が交わり、豊かな漁場となっている。

1－2．答志の生活・文化と日常的な交流

1）生業

答志集落は、漁業従事者が約 50%を占める純漁業の集落である。仲買や加工業に従事する者も含めると漁業関係者が約 70%を占める。答志に暮らす人々は、良好な漁場を背景に、古くから漁業を生業としてきた。その暮らしが、答志の民俗・文化を醸成してきた。港や市場といった生産施設の共有、漁業権・水産資源の共有、市場での入札の時間を基礎とした生活リズムの共有が集落に暮らす人々の集団的性格を成し、コミュニティの基礎となっている。

漁獲量が直接家計に影響する漁師にとって、日々の情報交換は重要であり、会話のきっかけにもなっている。漁業関係者でなくとも、「大漁やったか？」などは誰もが挨拶代わりに交わす言葉である。住民の間に漁・日和・漁価といった共通の話題があることは、交流を促す 1 つの要因となっている。このような日常的な交流は、コミュニティを支えるものとして重要な役割を果たしている。

2）寝屋子制度

答志には、「寝屋子制度」と呼ばれる若者宿の風習が現在も残っている。これは、中学を卒業した男子 5-7 名が結婚する 25-26 才までの間、集落内のある漁業者の家に寝泊まりし漁業技術や共同体の一員としての規範を学ぶことを目的としたものである。毎晩、風呂と食事を済ませると、それぞれの寝屋子に集まる。この毎晩の、交流の一言には収まらない様々な経験を共有することで、寝屋子同士、寝屋子と寝屋親の間には家族以上の絆が生まれる。寝屋子が解散した後も、「朋友会」として互い生涯にわたり、家族ぐるみで濃密な付き合いを続ける。寝屋子は答志の人々にとって最も重要なコミュニティであり、集落内に強固な絆を分布させている。

1－3．答志集落における日常的な交流の特性

コミュニティの基礎となる生業を通じた交流、強固なつながりを生む寝屋子制度を通じた交流の他、祭礼や地域社会組織の活動を通じた交流が存在している。集落を存続させるため、システム化・習慣化されたこれらの営みは、多様な交流を生みコミュニティを支えてきた。

強固なコミュニティを素地として、自発的な交流や、偶発的な交流も盛んである。魚を互いに配り合ったり、友人の家にふらっと飲みに行ったり。外で人に出会っても、必ず挨拶や会話を交わし、井戸端会議になることもしばしばである。これらのもまた、それぞれに意味をもち、コミュニティを支えている。

偶発的な交流や自発的な交流は、人と人のつながりを素地としながらも、100%それだけの要因で発生するものではない。本研究では、屋外空間における交流の実態観察を通じて、交流を誘発する空間とその成立要因を明らかにする。

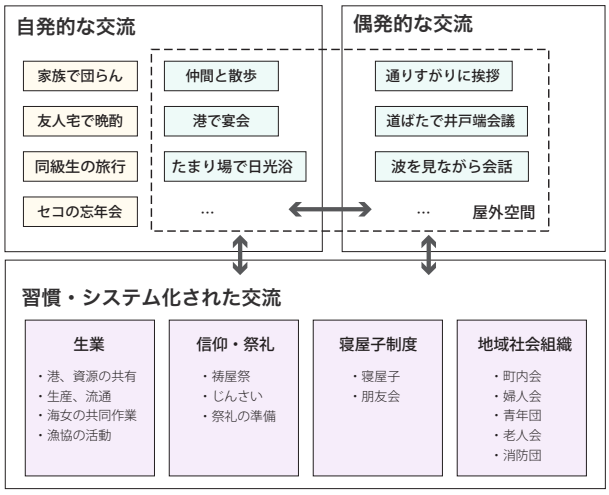


図１－１　答志集落における交流の特性 ダイアグラム

2．交流を発生させる素地としての集落空間

2－1．集落空間の特徴

1）集落の空間

答志の集落は、海沿いの平坦地と緩やかな傾斜地の谷沿いに広がる。 3 つの漁港を有し、市場、作業場、倉庫、海女小屋等の生産施設は海沿いに集中している。寺社は、山際などの集落の端に立地、店舗は、観光客向けのものは周縁部に、地元住民向けのものは中心部に点在している。公共的な施設は、じんじ舞台を中心にそこから上に集中している。漁業関係者が多くを占める答志では、生産施設の集中する海沿いで働く人がほとんどで、買い物も集落内に点在する商店で行われる。日常的な生活圏は、半径わずか 150m 程の中に職住商が近接したコンパクトな集落空間で簡潔している。

2）街路構成

答志集落の街路は、大部分が幅員約 1~2m と非常に狭い。海岸線に沿う浜通り、それに直行し和具と答志を結ぶ道が中心となり、地形に合わせて格子状に住居がネットワークされている街路構成は、一般的な街路構成と言える。答志では路地を「セコミチ」と言い、これを介した地縁集団を「セコ」と呼ぶ。この「セコ」の結びつきは強い。「セコミチ」を通路、生活空間、近隣空間として互いに共有することで、日常的に交流が行われ、近隣関係が醸成されている。また、答志の街路構成は、

一部の主要な街路を除いて、通行人が近隣住民に限られたものが多い。

3）住居空間

答志の住宅は、狭隘な敷地いっぱいに建てたものが多く、庭のある家は多くはない。奥行きのない敷地形状と、通りに面して玄関と台所があることが特徴である。また、外壁に接して外流しと洗濯機が外部に設置されている。

4）交流を発生させる素地としての集落空間

第1章で整理した社会的な素地の上に、集落空間の特徴が空間的な素地が重なることで、答志では多くの交流が発生している。以下にその特徴をまとめる。

Ⅰ．職住商の近接

わずか半径150m程の範囲に職住商が近接したコンパクトな生活圏では、人の移動による短いトリップが多数発生しており、交流の発生確率が高くなっている。

Ⅱ．幅員の狭さ

約1~2mという幅員の狭さにより、すれ違う際の距離が近く、挨拶をしないと不自然という状況がある。また、車が入れないことから人々は、徒歩や自転車、原付の自動二輪車で移動。挨拶や会話が容易である。

上記の2点が集落の屋外空間で偶発的な交流が多く発生する一般的な理由である。集落の屋外空間では誰とでも出会う可能性があり、互いの人間関係に関わらず発生するのが特徴である。これは集落の住民同士の1つ1つの人間関係を良好に保持する意味を持つ。

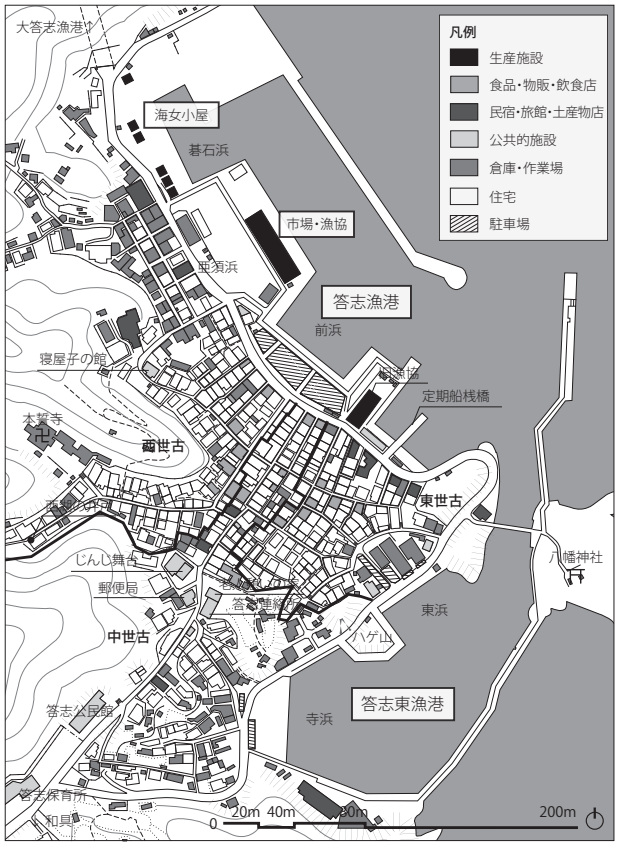


図2－1　集落の空間

2－2　屋外空間における交流の実態

1）調査概要

調査は、11月22日（火）（漁なし）と11月23日（水）（漁あり）に行った。漁業関係者が大多数を占める答志では、漁・市場が休みの日が休日となる。平日と休日のサンプルを得るため上記の日を選んだ。調査範囲は、集落の中心部とし、約800mの道のりを約15分かけて歩き、交流の発生地点のプロット、内容の観察、写真撮影を行った。両日、7時から17時まで、1時間ごとに調査を行った。

2）調査結果

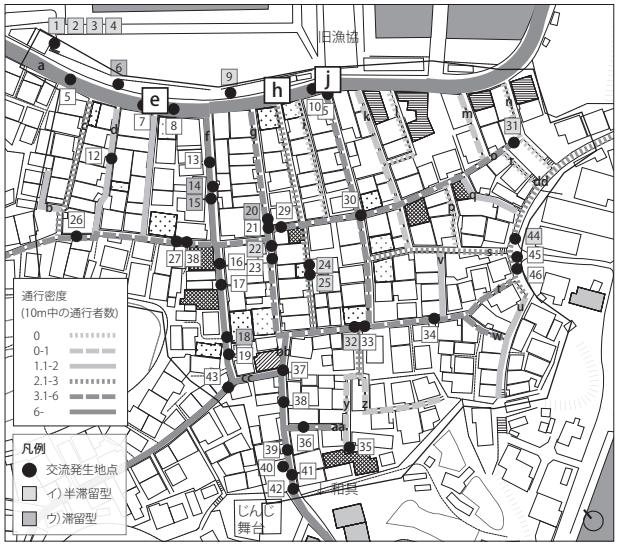


図2－3　調査結果22日（漁なし）

図2－4　調査結果23日（漁あり）

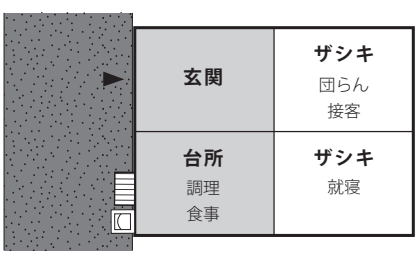
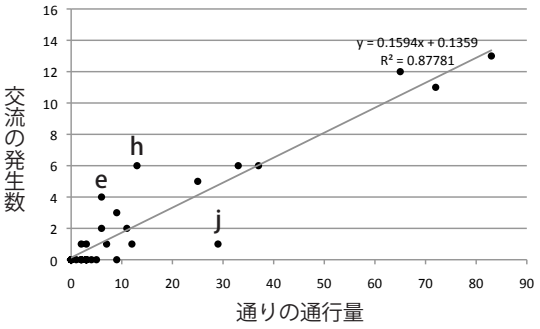


図2－2　住居平面 イメージ図

２－３．交流を誘発する空間的要因の分析

１）通りの通行量との関係

一般的に、人と人が出会いやすい通行量の多い通りで交流の発生が多くなると考えられる。実際に、両者の間には比例関係が確認できる。一方、通りｅや通りｈ、通りｊの様な例外も見られ、これらの通りには、通行量以外の何らかの空間的要因が存在していると考えられる。



グラフ２－１　通りの通行量と交流発生数

通りｅでは、外流しで魚を捌く人に関わる交流が多く観察され、通りｈでは、店舗の前や路上のゲリラ的店舗空間での交流が観察された。いずれも、通行量という線的な要因とは別のレイヤーにある、点的な滞留空間が交流を誘発する空間として作用していることが伺える。逆に通りｊは、通路としての性格が強く、塀を建てている家が多いことから空間的なしつらえとして近隣空間として利用されにくくなっており、これは逆に交流を抑制する要因として挙げることができる。

以上から、以降では点的な滞留空間の形成に着目する。ここで、観察された交流を、発生する瞬間の主体の行動により以下の３つの発生パターンに分類する。イ）半滞留型とウ）滞留型は滞留空間の作用により発生するものである。滞留とは、「人が動かずに屋外空間にいる状態」、滞留空間を「滞留している人とその人がいる空間」と定義する。特に、イ）半滞留型とウ）滞留型に着目しながら、交流を誘発する点的な滞留空間を明らかにする。

図２－５　通りｅ

図２－６　通りｈ

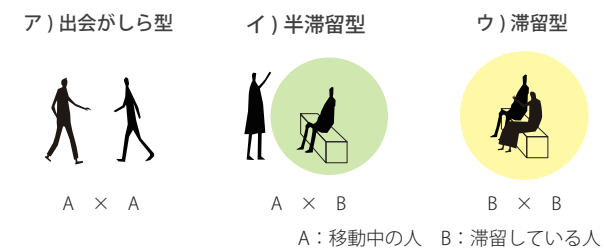


図２－７　交流発生パターンの３つの類型

２）交流主体の行動に着目して

□ 海沿い

波を見る漁師や日光浴をする高齢者の滞留により、ウ）滞留型の交流が多く見られた。さらにウ）滞留型の交流が形成する滞留空間が通行人との間にイ）半滞留型の交流を誘発している。また、日光浴をするおじいさんと洗濯物の干場に洗濯物を干しにきたおばあさんによる、滞留空間の重なりによる交流も見られた。

図２－８　22 日１

図２－９　23 日４

□ 居住地区

ア）出会い頭型の交流が最も多いが、店舗前や外流しでの滞留が通行人との間に交流を生むイ）半対流型も多く見られた。特に、漁のあった 23 日には、魚を捌くなどの外流しの利用によって形成された滞留空間に関わるものが多い。

図２－１０　23 日 10

図２－１１　23 日 25

□ 居住地区

ア）出会い頭型の交流が最も多いが、店舗前や外流しでの滞留が通行人との間に交流を生むイ）半対流型も多く見られた。特に、漁のあった 23 日には、魚を捌くなどの外流しの利用によって形成された滞留空間に関わるものが多い。

２－４．小結

本章の結論として、交流を誘発する要因を整理する。レイヤーに分けると、最も基礎には、第１章で整理した強固なコミュニティがあり、この社会的な素地により集落では人と人が出会えば交流が発生するとう状況がある。その上に重なるのは、職住商の近接と幅員の狭さという集落空間の特徴のレイヤーである。これらが空間的な素地となり、集落全体で交流の発生確立を高めている。また、集落の空間構成が、通行量という人の活動密度の濃淡をつくる。通行量の多い通りではア）出会がしら型の交流が発生しやすい。しかし、これは一般的な話である。通行量とは別のレイヤーで交流を誘発するのが、滞留空間である。滞留空間は外流しの利用や高齢者の日光浴などの行動によって形成されるもので、集落での生活に密接に関わる、固有のものである。

Chikako Yasukawa

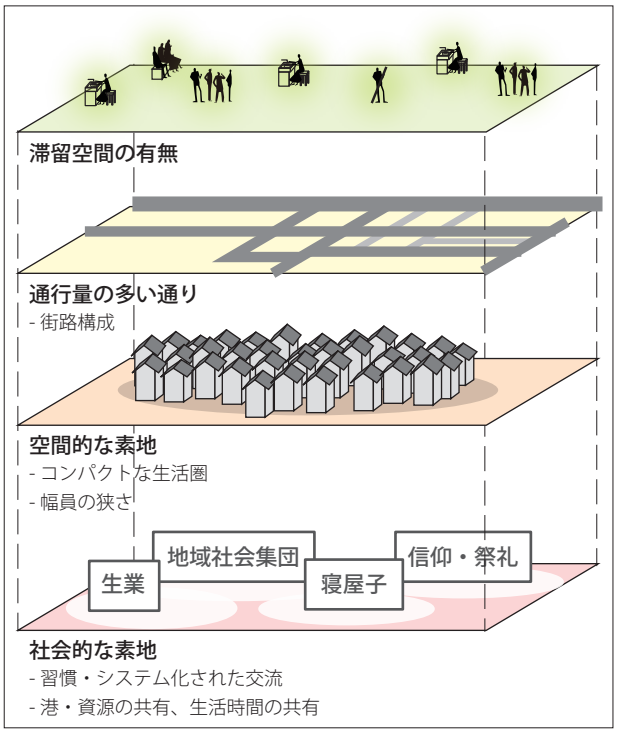


図２－１２　交流を誘発する要因

３．滞留空間の成立要因

交流を誘発する空間の中でも集落に固有であるものとして滞留空間に着目し、その成立要因を明らかにした。実態観察調査から明らかとなった、滞留空間を形成する主体の行動に基づき、滞留空間を以下の３つに分類した。

① **たまり場**：高齢者の日光浴、漁師が波を見る
② **店舗前空間**：買い物
③ **外部家事空間**：外流しの利用、洗濯物の干場の利用

これらをそれぞれ詳しく見たところ、それぞれの成立要因が明らかとなった。

３－１．たまり場

たまり場に共通する空間的な条件として以下の４つ挙げることができる。

Ⅰ．北西の建物や山により、風が遮られる
Ⅱ．日当りの良い場所
Ⅲ．背後を建物や山が囲い、もう片方は海沿いや空地に視界が開けている
Ⅳ．主要な動線に正対せず、適度な距離がある

暖かく、囲まれ感と開放感のバランスがよく、落ち着いた場所の快適性が高齢者の日光浴の利用を誘発し、滞留空間が形成されることがわかる。漁師は、このような快適性に加え、波が見える場所や、漁具を置けるといった機能が必要である。

３－２．店舗前空間

店舗前空間における交流は、共通する条件として女性が中心であること、欲しいものが売っているという機能が重要で、空間の快適性は関係ない。滞留空間の成立要因としては、これらの店舗のもつ求心力の強さと、空間の形態として、路上に品物が陳列されていることによる店舗空間の路上化が挙げられる。

３－３．外部家事空間

１）外流し

外流しは、答志のほぼ全ての住宅に設置されており、塀や壁に囲われたものも見られるが、過半数は路上にむき出しで設置されている。魚を捌くなど様々な用途に利用されており、その利用を通じて家事活動が外部化されることにより、滞留空間が形成されている。外流しが、家事活動を路上化させる装置として作用している。

２）洗濯物の干場

住宅の敷地の狭隘な答志には、物干し台のない家が約50%存在している。物干し台のない家では、家の近くの海沿いや空地の良く日光があたるところに物干し台をつくり、半ば既得権益の様な形で、譲り合って干している。

３－４．小結

以上から、滞留空間の成立要因として以下の２点を挙げることができる。

Ⅰ．空間のもつ機能と快適性

空間のもつ機能と快適性のどちらか、または両方が必要とされ、空間が利用されたときに、滞留空間が成立する。しかし、高齢者の日光浴は以外の行動は快適性よりも機能への依存が大きく、特に、買い物や家事活動については、快適性はあまり関係がない。機能依存型で成立する滞留空間が多いことが、特徴と言える。

Ⅱ．目的に応じてしつらえられた装置の存在

それぞれの滞留空間には、必要とされる機能、目的に応じた装置がしつらえられている。これらは集落固有の生活に呼応したものである。堤防の上に設置された台は漁師が波を見るために、外流しは外で魚を捌くためにしつらえられた装置である。

以下に、それぞれの行動により形成される滞留空間の成立要因と、それぞれの空間が有する装置をまとめた。滞留空間は、装置を、人が利用することで成立するものである。次章では、これらの装置の中でも特徴的で、また交流発生数から見ても特に重要と思われる外流しについて、成立要因を明らかにする。

	利用行動	成立要因			交流数
		快適性	機能	装置	
たまり場	高齢者の日光浴	○	座る	ベンチ・椅子	9
	漁師が波を見る	○	波が見える	波を見る台	3
	漁師の網仕事	○	漁具が置ける	倉庫、漁具置き場	0
店舗前空間	買い物	-	欲しい商品が売っている	外部に陳列された商品	6
外部家事空間	外流しの利用	-	外で洗う , 捌く	外流し	**11**
	洗濯物を干す	-	日光が当たる	物干	1

表３－１　滞留空間の成立要因と装置

4．外流しの成立要因

4－1．居住生活側の条件と生業側の要請

外流しは、住居内部に生活用水を出し入れする習慣から台所といった水回りが道に接しているという住居空間の条件と、漁具やカッパを洗ったり、魚を捌いたりする作業を外で行いたいという生業の要請が重なることにより発生したと考えられる。

4－2．外流しの利用実態

外流しは、漁具やカッパを洗う、魚を捌く以外にも、様々な用途に利用されている。野菜を洗う、雑巾を洗う、空き缶を洗う、夕食の下ごしらえなどにも利用され、昔、各家に風呂がなかった頃には行水をするなどにも利用されていたという。

4－3．外流しの形態

外流しは、各世帯ごとにそれぞれ形態が異なっているが、交流が観察された外流しは、すべて塀や壁によって囲われていないという共通点があった。このことから、塀や壁の有無により外部の家事空間を 4 つに類型化した。分布は以下の通りである。

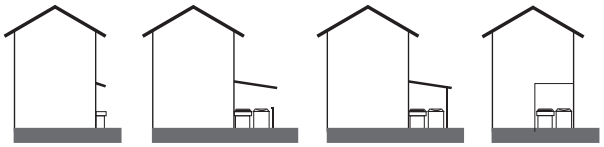


図4－1　外流しの 4 類型

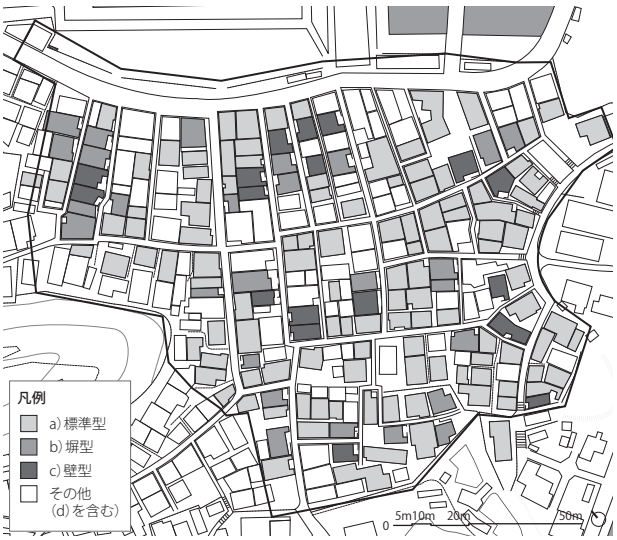


図4－2　4 類型の分布

外流しは、個人の生活空間の一部であり、その形態には所有者の意識が一定程度表れている。塀や壁を立てる、土間に取り込むといった行為は、本来内部において行われる家事活動、プライベートな領域性を持つ行動を外から見られないようにしたいという思いの表れではないかという仮説を検証するため、その理由をアンケートで調査した。その結果は表の通りである。ここからは、プライベートな行動を中に閉じようとする意思は感じられない。むしろ、外部空間に生活を開くことに対して抵抗はないと考えられる。また、中の流しと外の流しの使い分けの項目からは、衣類を洗う、靴を洗う、掃除用品を洗う、リサイクルの缶やペットボトルを洗う、犬の足を洗うなど、様々に利用されており、「外のものや汚いものは外で」という利用が、外流しがあることによって誘発されていることが明らかになった。さらに、外流しでの交流についての意識調査からは、道で挨拶を交わすのと、外流しの利用時に挨拶を交わすのは全く同様のものであり、あくまで、外流しは外部という感覚であることが明らかになった。外流しは、外部空間に生活を開くという住まい方の一つの場面として読み解くことができる。

生活用品がはみださないように	生活用品を風雨から守るため	生活用品を見られないため	作業中の姿を見られないため	他
7	12	0	1	3

表4－1　塀・壁と立てる理由 アンケート結果

5．結論

本研究から得られる視点は以下の 3 点である。

Ⅰ．集落固有の生活に呼応した装置が誘発する交流

集落固有の生活に呼応して発生し、なくてはならないものとなっている装置が、滞留空間を形成し、それが交流を誘発する空間となっている。交流を誘発する空間は、装置の存在によって、成立しているものなのである。

Ⅱ．海と共にある暮らしが育むコミュニティ

答志の、海と共に生きるというあり方は、良好で強いコミュニティを生む必然と必要をつくりだしている。答志の歴史・文化・経済・社会・生活は全て、海と共に生きることによって醸成されてきたものであり、滞留空間を形成する、外流しといった装置もまた、このことによって生まれたものである。装置は、滞留空間を形成し、交流を誘発することで、コミュニティを支えている。

Ⅲ．コミュニティと空間の相互関係

外流しの成立要因の根幹には、そこには外部と生活空間を共有する、外部に生活を開くという住まい方がある。答志に暮らす人々は、生活空間を公の空間の中に置くことで、住生活の中に社会生活を取り込んでいるのである。このようなあり方が交流を誘発する空間の本質であり、集落のコミュニティを支え、また逆にコミュニティがこのようなあり方、空間を成立させてきたと言える。

参考文献

1．濱口武次郎、山下伴郎、(2009)、「答志の昔」
2．高木文子、石沢英子、「志摩国答志島の民俗」皇學館大学郷土研究会
3．畑らによる一連の研究：加藤智泉、野上公久、畑聡一、(1994)、「答志におけるミチ空間の仕組みに関する類型的考察 - 離島漁村の高密度居住形態に関する研究 -」など
4．山本泰広、岩田明士、山本 健司、宮崎隆昌、(2002)、「離島漁村における外部空間の構成に関する研究 - 外部空間から見られる地域コミュニティ -」

Chikako Yasukawa